



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	研究ノート：「か」が必要な疑問詞のある文における中国人の誤用についてのアンケート調査 A survey into sentences requiring question word and 'ka'
Author(s)	許 英淑 (Xu Yingshu)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.15 : 131-139
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

研究ノート：「か」が必要な疑問詞のある文における中国人の誤用についてのアンケート調査

許 英淑

北京外国語大学

xyingshu@yahoo.co.jp

A survey into sentences requiring question word and ‘ka’

Xu Yingshu

Beijing Foreign Studies University

Abstract

本論文は、2011年3月に北京外国語大学日本語学部の学部生を対象に行われた“「か」が必要な疑問詞のある文についてのアンケート調査”の結果報告書である。結果も誤用のパターンも予想通りのものだった。興味深い結果もあった。特に、日本語経験者グループの「質問文」と「誘い掛け文」の混同がそのグループの4分の1をも占めたことが予想外だった。それは学習段階での教材及び指導教師の違いによるものかと思われる。反省すべき点は、調査用文に文脈がないことと、「疑問」と「不定」を表す「か」についての調査用文に「全称」を表すものもあつたりして被調査者を混乱させた可能性があることである。

This paper reports on the result of a survey done in March 2011 with students of Beijing Foreign Studies University into sentences requiring question word + ‘ka’ constructions. Results of the survey were in line with expectations, however there were also some noteworthy results. In particular the fact that as many as 1/4 of the students with experience in Japan would have trouble with question and request patterns was unexpected. This may be due to differences in the teaching materials and methods used during their instruction. A point to review is whether the participants may have been confused between the patterns used in the survey containing question word + ‘ka’ for either questions or indefinites, with sentence patterns using question word + ‘mo’ for universal quantifiers.

キーワード: 日本語教育、疑問文、誤用、アンケート調査

Key Words: teaching Japanese, interrogative sentences, errors, survey

1. 問題提起

日本語の疑問詞の「用法としては、(1) 疑問を表す（「どっちへ逃げたか」「どれがほしいか」）、(2) 「か」「やら」などを伴って、不定を表す（「だれか適任者はいないだろうか」「どこからか虫の音が聞こえてくる」）、(3) 全称を表す（「だれも知らない」「いつでもいない」）、(4) 代用を表す（「この間だれだれに会った」「なにになにはだいじょうぶだろうね」）などがある。」¹

本稿では、(1) の疑問を表すものと、(2) の「か」「やら」などを伴って不定を表すものをとりあげる。

(1) の疑問を表すものとして、具体的には、直接（一般）疑問文と間接疑問文に分けられる。直接疑問文の例として、次のようなものがある。²

A 群

1. これは何ですか。
2. どこが図書館ですか。（図書館はどこですか。）
3. 留学のことは誰に聞けばいいですか。
4. いつ調査を行いますか。
5. 漢字はいくつぐらいありますか。
6. これからはどうしますか。（どうすればいいですか）
7. これはどのように説明しますか。
8. 王先生はどんな先生ですか。
9. 上海へは何回行きましたか。
10. なぜ授業に行かないのですか。

間接疑問文の例として、次のようなものがある。

B 群

11. あれは何なのか分かりません。
12. 王さんがどこへ行ったか教えてください。
13. 王さんが誰と結婚したか、すぐ調べます。

¹ Yahoo!百科事典「疑問詞」日本大百科全書（小学館）（執筆者 鈴木英夫）による。

² ここに挙げた日本語の例文は《総合日語第一冊修訂版》（北京大学出版社）という教材からの引用か、アンケート調査のために筆者が作ってから、日本人の鈴木典夫先生（北京外国語大学日本語学部所属する日本語の専門家であり、日本流に言えば、客員講師である）に見ていただいた後、選定したものである。中国語訳は筆者自身がしたものである。

14. あの事件はいつだったか、この本には書いていません。
15. 漢字はいくつぐらいあるか、調べてみます。
16. あれから、あの二人はどうなったかは誰にも分からない。
17. あの事件をどのように説明するのか聞いてみたいです。
18. 王先生はどんな先生なのか、学生はみんな知っています。
19. 自転車を何台失くしたか、もう覚えていません。
20. 彼がなぜ授業に行かなかったのか調べなければいけません。

(2) の「か」を伴って不定を表すものとして、次のようなものがある。

C 群

21. きっと何かあったでしょう。
22. 誰か来ましたよ。
23. 明日、どこかへ行きましょう。
24. いつか富士山に登りたいです。
25. いくつか質問があります。
26. なぜか彼は突然笑い出した。
27. 何人かの学生がシンポジウムで発表しました。

日本語において、以上のような文には疑問や不定を表す助詞「か」が普通、必要である。

では、中国語の疑問詞のある文において、どういう構文になるのだろうか。まず、普通の疑問文の場合、つまり、疑問詞のない疑問文はどうなっているのか。例えば：

你去公园吗？(あなたは公園へ行きますか)

この場合、日本語の「か」にあたる「吗」が必要である。しかし、疑問詞が入ると、中国語においては、そのまま疑問文になる。そして、疑問符をつけるのが普通である。

前述の日本語の例文を中国語に訳すと、次のようになる。

A 群

1. 这是什 么？
2. 哪里是图书馆？(图书馆在哪儿？)
3. 留学的事问谁好？
4. 什 么时候进行调查？
5. 汉字大约有多少？
6. 今后怎 么办？
7. 这个如何说明？
8. 王老师是什 么样的老师？
9. 上海去了几次？
10. 你为什 么不去上课？

B 群

11. 不清楚那是什 么。
12. 请告诉我小王去哪里了。
13. 我 马上查查，小王和谁结婚了。
14. 这 本 书没写那个事件是何时发生的。
15. 查一查汉字有多少？
16. 谁也不知道从那以后那两个人怎 么样了。
17. 我想问问那件事如何解释。
18. 学生都知道王老师是什 么样的老师。
19. 不记得丢了几辆自行 车。
20. 必须查一查他为什 么没去上课。

C 群

21. 一定是出什 么事了吧。
22. 有谁 (人) 来了。
23. 明天去哪儿 (逛逛) 吧。
24. 有朝一日想爬富士山。
25. 有几个问题。
26. 不知为何他突然笑了起来。
27. 有几个学生在研讨会上做了发表。

お分かりだろうと思うが、日本語の「か」にあたる「吗」は全然出ないのである（もちろん訳しようにより、全部訳し出せないわけではないのだが）。

この違いは日本語学習者にとっては、初心者だけでなく、長く日本語にかかわった人でも間違えることがある。特に B 群の場合は著しい。もちろん、日本語歴が長くなるにつれて、その間違いも少なくなると、これは長年の教育現場で、ぼんやりと感じていることだった。それで、学生の日本語歴によって、その実態は筆者の感じたものと一致するかどうか、実際に検証してみることにした。

普通、A 群を間違えるのが少ないが、B 群、C 群との対照が分かりやすいように、A 群も同時に訳させた。

2. 調査実施

2011 年 3 月に、北京外国語大学日本語学部の学生を対象に、以上の A, B, C に出ている中国語の文を日本語に訳すというアンケート調査を実施した。

対象は比較が簡単になるように、日本語経験者（大学に入る前に 2 年以上日本語を学習した人）グループ（以下経験者グループとする）と、日本語の初心者（大学に入ってから日本語を始めた人）グループ（以下初心者グループとする）に分けた。

経験者グループは、二クラス（二年生一クラスと三年生一クラス）全部で 42 人、うち女性 35 人、男性 6 人、不明 1 人と、日本語歴は最短 4 年、最長 13 年だが、ほとんどが 6, 7 年である。

初心者グループは、二クラス（全員三年生）全部で 34 人、うち女性 30 人、男性 1 人、不明 3 人と、調査実施時点で日本語歴 2.5 年である。

3. 調査結果

ここで言う結果は、主に、疑問、あるいは不定を表す「か」を訳し出せたかどうかと、ある程度意味が通じるかどうか（例えば、「王さんが誰と結婚したか、すぐ調べます」と「すぐ調べます、王さんが誰と結婚したか」は、語順が違うだけのようなものだから、正解としたというようなもの）と、テンスに問題ないかどうかということを問題にしている。

では、経験者グループから見てみよう。

A 群

1. 「か」無しが 5 人。
2. 「か」無しが 5 人、問題外の間違いが 1 人。
3. 「か」無しが 5 人、問題外の間違いが 1 人。
4. 「か」無しが 5 人、問題外の間違いが 3 人。
5. 「か」無しが 5 人、「いくら」13 人。
6. 「か」無しが 12 人、問題外の間違いが 2 人、「か」の代わりに「の」を使ったのが 1 人。

7. 「か」無しが5人、問題外の間違いが5人、「か」の代わりに「の」を使ったのが1人)。
8. 「か」無しが5人、問題外の間違いが6人、テンスの間違いが1人、「か」の代わりに「の」を使ったのが1人)。
9. 「か」無しが5人、「ませんか」2人、問題外の間違いが1人、テンスの間違いが1人、「か」の代わりに「の」を使ったのが8人)。

B 群

11. 「疑問詞無し」4人、問題外の間違いが9人、文を二つにしたのが2人。
12. 文として成り立たないのが1人、間違いが6人、文を二つにしたのが2人。
13. 文として成り立たないのが3人、「か」無しが12人、「疑問詞」無しが1人、テンスが1人、文の意味が違って来るものが3人。
14. 「か」無しで文が成り立たないものが7人、文法的間違いが7人、
15. 文として成り立たないのが10人、文の意味が違って来るのが2人、文が二つにしたのが2人。
16. 文として成り立たないのが14人 (中には、「誰でも知らない」を使ったのが5人もいた)、「疑問詞」無しが1人、「どうなのか」4人。
17. 文として成り立たないのが7人、「するのを」4人、「するかと」1人、文が二つにした人が2人。
18. 文として成り立たないのが9人、不自然な文が6人。
19. 文として成り立たないのが12人、「か」はあるが文として成り立たないのが7人、文の意味が違うのが2人、不自然な文が2人。
20. 文として成り立たないのが11人、「疑問詞」無しが2人、「行かなかったかを」3人、文を二つにしたのが1人、。

C 群

21. 文として成り立たないのが6人、意味が違う文が6人、不自然な文が4人。
22. 文として成り立たないのが6人、疑問文にしたのが5人、テンスの間違いが2人。
23. 文として成り立たないのが5人、意味が違うのが1人、不自然な文が1人。
24. 文として成り立たないのが5人、問題外の間違いが1人、意味が違うのが1人、不自然な文が4人。
25. 文として成り立たないのが6人、意味が違うのが3人。
26. 文として成り立たないのが13人、意味が違うのが2人、不自然な文が3人。
27. 文として成り立たないのが20人、意味が違うのが1人、不自然な文が1人。

番号	経験者グループ			初心者グループ		
	正解	誤答	グレーゾーン*	正解	誤答	グレーゾーン
A 1	100.0%	0.0%	0.0%	84.4%	15.6%	0.0%
2	100.0	0.0	0.0	81.2	18.8	0.0
3	97.6	0.0	2.4	81.2	18.8	0.0
4	100.0	0.0	0.0	75.0	25.0	0.0
5	100.0	0.0	0.0	44.0	56.0	0.0
6	95.2	4.8	0.0	56.2	43.8	0.0
7	100.0	0.0	0.0	69.0	31.0	0.0
8	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
9	100.0	0.0	0.0	62.5	37.5	0.0
10	74.0	26.0	0.0	72.0	28.0	0.0
B 11	85.2	9.4	4.8	63.0	31.0	6.0
12	80.6	9.4	0.0	61.0	53.0	6.0
13	80.6	9.4	0.0	47.2	43.8	9.0
14	86.0	14.0	0.0	47.0	53.0	0.0
15	93.0	7.0	0.0	56.5	31.0	12.5
16	74.0	26.0	0.0	40.6	59.4	0.0
17	74.0	26.0	0.0	56.5	37.5	6.0
18	81.0	19.0	0.0	53.1	21.9	25.0
19	71.4	28.6	0.0	28.1	59.4	12.5
20	79.0	21.0	0.0	47.0	50.0	3.0
C 21	71.4	28.6	0.0	50.2	18.8	31.0
22	79.0	21.0	0.0	59.4	40.6	0.0
23	93.0	7.0	0.0	78.4	15.6	6.0
24	97.6	0.0	2.4	65.6	18.8	15.6
25	100.0	0.0	0.0	72.2	18.8	9.0
26	42.8	28.6	28.6	31.4	40.6	28.0
27	88.0	12.0	0.0	31.5	62.5	6.0

注* グレーゾーンとは不自然な文だったり（この本はその事件はいつ起こったかを述べませんでした）、1つにすべき文を2つにしたり、訳さなかったり、文として成り立たなかったり（その事件はいつ発生したか、この本ではないです）、意味が違ったりする場合を指す。不自然な文の判定は、大阪大学の春木仁孝先生にさせていただいたのだが、それをもう少し緩めの基準にして筆者の独断で判断した。

4. 分析

以上の統計結果からは、以下のことが言えると思う。

まずは、全体的に言えば、経験者グループにおいて、「か」が必要な疑問詞の使い方に関しては、全部正解した学生はたったの11人だけだった。中にはテンスや単語の違い、日本語らしくない表現という問題もあった。B群はやはり、間違いが多く、ほぼ全部間違えたのも2人いた。

初心者グループにおいては、「か」の使い方に関して言えば、ほぼ正しかったのはたったの7人（うち3人が全部、ほかの4人には間違いが2つあった）。しかし、この7人にはほかの問題外や単語の使い方などの間違いがあった。

A群において、「か」を一つも使わずに？で表現した人が5人もいた。もちろん、「か」は日本語の実際の会話では、適切なイントネーションをつければ、省略もできるのだが、B群の使い方との関連を考えて、私たち外国人にとって外国語としての日本語教育現場においては、必ず「か」を省略せずに文を作るように指導している。というのは、A群の「か」を省略するくせができると、B群を間違える可能性が高くなる恐れがあるからである。だから、ここでは、あえて、不正解のほうにしたのである。

B群において、文を二つにしたのが2人（1人が4つの文、1人が6つの文）もいた。B群がほぼ全滅の人が5人もいた。C群がほぼ全滅の人も2人いた。

次は、経験者グループは、もちろん間違いも多いが、全体的に訳文が日本語らしく、通じそうに通じないようなでたらめな間違いが少ない。これはつまり日本語歴が長いぶん、日本語の語感も身についてきたという証しだろう。

それから、統計数字が物語っているように、予想通り、初心者グループも経験者グループも、両方ともB群、つまり、間接疑問文の間違いが多かった。これは、中国語の影響を受けているためだと思われる。つまり、前にも述べたが、中国語の間接疑問文には日本語の「疑問」や「不定」を表す「か」に当たる「吗」はほとんど出ないのである。だから、そういう中国語を日本語に訳す時、無意識のうちに「か」が抜けてしまうのだろう。この場合、初心者も経験者も同様である。ただ、日本語歴に比例して、短いほど、中国語の影響が強く、間違いも多いようである。

ちなみに、B群で「やら」とかを使った学生は1人もいなかった。「やら」などが使えるレベルには、初心者グループはもちろん、経験者グループもまだそこまで達していないということであろう。

また、経験者グループに面白い間違いが一つあった。それはつまり、A群の10番、「どうして～行かないのですか」というべきところを、11人もの学生が「どうして～ませんか」を使ってしまった。42人のうち、4分の1が間違ったことになる。つまり、普通の疑問文と、「～ませんか」という誘いかけの文とを混同させてしまったようである。5、6年間以上日本語をやってきたのに、普通の疑問文と誘いかけの文とを混同させるのは、お粗末である。それに対して、初心者グループにはたったの2人しかいなかった。これは教材や指導教師と関係があると思われる。初心者たちは、同じ大学で同じ教材で、ほぼ同じ指導法(?)のもとで勉強してきたため、使っている教材はその二つの使い方をはっきりと解説してある上に、講義中では指導教師もその違いをきちんと指導してきたはずだと思う。その点、経験者グループは教材や教師の指導法など、ばらばらのはずである。

もう一つ、経験者グループの中に、1人だけ、「いつか富士山に登りたい」の「いつか」を「いずれ」に訳した学生がいた。文としてはまったく問題ないが、しかし、はっきりと意味的には違いがある。その違いも人によってまちまちのようである（何人かの日本人に聞いてみたが、それぞれの説明が違っていったから）。使った学生がその違いを知っていて使ったのか、それともたまたまその単語を思いついたから使ったのかは分からない。だから、それをグレーゾーンのほうに計上した。

5. 反省点

まずは、今回のような単文のアンケート調査は、文脈とか、文の流れがないため、主語や対象などが、訳者によってそれぞれ勝手に理解できる場合がある。そのため、主語と対象のまったく違う文になったりするものも出てきた。だから、次回、もし同じような調査をする場合は、もう少し主語のはっきりした文にしたほうがいいと思う。

次に、全称を表す疑問詞（「誰でも分かっている」）の文も入ったりしているため、余計、学生の思考を混乱させたきらいがあると思う。疑問文なら疑問文だけ、不定文なら不定文だけ、ごっちゃにせずに、単純な文のほうが被調査者もやりやすいし、調査結果も分かりやすいものになるだろうと思う。

文献

相原茂. 1996. 『why にこたえるはじめての中国語の文法書』 同学社.

彭 広陸, 守屋三千代. 2009. 《综合日语第一册修订版》. 北京大学出版社.

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2012.1.10)